大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ドイツにおける石原莞爾（その二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006212

ドイツにおける石原莞爾（その二）

伊藤嘉啓

一　戦地見学

最近（平成七年）、『「日本株式会社」を創った男――宮崎正義の生涯』（小林英夫著、小学館）といふ本が出版された。宮崎正義――いかなる人名辞典にも載つてゐないとのことであるが、石原の経済関係ブレインの一人として、本稿では、既にふれた。宮崎は「市場経済に立脚しつつも官僚主導の部分的統制を織り込んだ日本独自の経済統制システム」（同書、四頁）の提案者と云はれる。このシステムは、まづ、満洲で具体化し、その後、日本本国でも採用され、それは終戦によつて途絶えることなく、かつて満洲で活躍した官僚たち、岸信介や椎名悦三郎などにより、戦後の日本にも継承され、今日まで脈々と生きつゞけたのである。宮崎は過去完了の存在ではない。

宮崎の提言が、満洲で実行に移されたのは、もちろん、石原の後押しがあつたからである。石原と宮崎の結びつきは、深い。二人の出会ひがどのやうなものであり、宮崎から見た石原とは、どういふ人物であつたかは、「秋二日」と題する回想記から分かる。それは、昭和五年の旅順駅頭であつた。宮崎が、旅順の関東軍司令部において講演を依頼された時である。駅には、石原中佐が迎へに来てゐた。ヤマト・ホテルで休憩し、軍司令部に行つて講演、そして夕食会の後、石原が馬車で駅まで送つて来た。

汽車が動き出すと石原さんはホームに直立不動、挙手の礼で送られた。何時までも、何時までも。私はその後も随分講演を頼まれたことはあるが、石原さんほどの心遣ひをされたことは極めて稀である。……当時私は大連満鉄本社の一職員に過ぎなかつた。

（『石原莞爾研究』第一集、八六頁）

石原は宮崎より四歳年上であつたが、いつも宮崎を「先生」と呼んでゐたさうである。

☆

ザクセン地方への旅行は、五月二十七日から三十一日までの四泊五日であつた。

独乙ハ御承知ノ如ク聯邦組織ニテ、昔ハプロイス、ババリア、サクソニア、ノ三王国ガ尤モ有力ナリキ。此サクソニアノ首府ガドレスデンニテ伯林ノ南方汽車約三時間半（急行）行程ニアリ。

（六月一日）

プロイス、ババリア、サクソニアは、いふまでもなく、それ〴〵

Preußen, Bayern, Sachsen に当たる。第一日目は、ドレスデンの郊外、ドイツとチェコとの国境になる渓谷は、エルベ砂岩山地(Elbsandsteingebirge)と云はれ、岩の露出した風景として有名であり、「ザクセンのスイス」とも称せられるのであるが、まづ、こゝを観光した。

山ニアラズ丘ナリ。只水成岩ガ到ル処ニ暴露シ丁度妙義山ノ如キ有様ヲナス。

大シタコトナキモ平調ナル独乙国内トシテハタシカニ珍ラシキモノナルベシ。(六月一日)

「平調ナル独乙」とは、ドイツには山が少ないので、風景が単調だといふ意味であらう。翌日は、エルベ河を船で下り、その辺りを馬車に乗つて見物し、友人たちはベルリンへ戻つたが、石原は皆と別れ、ナポレオンの跡を追つて、ライプツィヒ、イェナへと足をのばす。

ライプチヒモナポレオン奮戦ノ地、一八一三年遂ニ聯合軍ニ敗ラレシ所ニテ独乙人ノ尤モ得意トスル所、自由戦争又ハ国民戦争トイヒ、大戦前年出来タル大記念塔アリ。

イェナハナポレオンガ大ニプロシア軍ヲ敗リシ所。(六月一日)

ナポレオンは戦へば必ず勝つた。生涯に四十回の戦ひに勝利したといふ。しかし、あらゆるものには、終りがあるやうに、ナポレオンにも凋落の時がやつて来た。一八一二年、ナポレオンは六十万の大軍を率ゐて、モスクワへ遠征したが、敗退。それまで、ナポレオンに虐げられてゐた国々は、このニュースに勢ひづいた。

一八一三年、プロイセン、オーストリア、ロシアは同盟を結び、十月十六日から十九日にかけて、ライプツィヒ郊外で、同盟軍はナポレオン軍を破つた。これが手紙にある「自由戦争又ハ国民戦争」である。この戦争は歴史上の転機となつた。翌一四年三月のパリ陥落、四月のナポレオンの失脚へとつながつて行くからである。

イェナはライプツィヒの南西にある小都市、大学町として知られてゐるが、石原の関心は、こゝでもナポレオンである。時間的にはライプツィヒの戦ひより七年も溯つて一八〇六年、この地でプロイセン軍はフランス軍に大敗し、領土を割譲し、賠償金まで支払はねばならなかつた。

イェナまで来れば、ワイマルは目と鼻の先である。この旅行は、「戦場見学ノ目的」であつたから、主目的に比べれば、序であつたかもしれないが、ワイマルに立ち寄ることも、石原は忘れてゐない。

ワイマーハ歴史的ニハ中々興味多キ所、ゲエテ、シルレルノ居住セル家ハ原形ノママ保存セラル。(六月一日)

以上が、この度の小旅行の報告である。

二　ワンデルン

ザクセンへ行つて来たばかりなのに、石原は間もなく、また旅行を計画した。ドイツ人は、若い者も年寄りも、男も女も、リュックを背負つて山野を歩き廻るのが大好きで、石原はこの人たちと一緒に歩きたいものと、常々、思つてゐたのであるが、はからずも、ちん君の紹

介で、ドイツ人の仲間入りが出来るやうになつた。出発は六月九日、行先はベルリンの西、ハルツ地方、予定は一週間である。この遠足の様子と感想を、石原は六月十七日（帰宅の翌日）の手紙に記してゐる。

旅行ノ目的ハ　一、独乙ノ農村ヲ見ルコト。
　　二、独乙人ノ所謂ワンデルン（徒歩旅行）ヲ味フコト。

ノ二ツニアリキ。

第一ノ目的ノ為ニハ、幸ヒちん君ノ家ガ人口三千計リノ農村ノ中ニアルヲ以テ、其尽力ニヨリ相当ノ農家ナル彼ノ叔父ノ家ニ二泊セリ。エルベー河畔ハ独乙トシテ最モ肥沃ノ地ト称セラレ、殊ニ其叔父ハ村内屈指ノ農家ナリ。然モ其生活ハ寧ロ日本農家以下ト称スベク室内ハ支那式ノ臭気ヲ覚ユル位也。

二日ノ滞在デ十分下級農民ノ生活ヲ知ルコトガ出来ナカツタノガ残念ダガ、然シ相当面白カリシ。（六月十七日）

更に手紙には、ドイツ人の「ワンデルン」好きについて述べてゐる。

老若男女真ニ老若男女ダ。六十以上ノ老人等ガ大キナズダ袋ヲ負ツテ歩クノハ甚ダ珍シクナイ。子供ハ小学校デ予メ貯金シ年々必ズヤル。……

殊ニ美事ナノハ年頃ノ青年男女打チ揃ヒ、男ガ色々ノリボンデ飾ラレタマンドリンヲヒクノニツレテ、一同歌ヒナガラ進ンデ行ク有様ダ。（六月十七日）

行進の描写まで入れて、叙述は活き〳〵としてゐる。いかにも、健全な精神は健全な肉体に宿るのを、地で行つてゐるやうである。

此頃加藤君ノ兄サン等盛ンニヤル日本ノ山岳旅行等モ、此西洋風ノ影響ナルコトハ明カダ。独乙国デハ国民ニ雄健ノ風ヲ養成スル為メ、特ニ力ヲ用ヒテ、之ヲ奨励シタノハ勿論デアルガ、一ツハ平凡極マル土地ニ住ンデ居ル憐レムベキ毛唐、殊ニ伯林市内ニ居テ穴蔵生活ヲヤツテ居ル者共ニハ。（六月十七日）

手紙の内容からも分かるやうに、石原が参加したのは、ワンダーフォーゲル。この運動は十九世紀末に、ドイツ人ホフマン（Hermann Hoffmann, 1875–1955）によつて創始されたのであり、いはばドイツが本場で、その目的は、「雄健ノ風ノ養成」である。

石原はドイツの農村に強い興味を示し、ワンゲルにもすゝんで参加してゐる。一体、この頃に、日本から欧米に留学した者たちは、何よりも、まづ産業の成果に驚嘆したのではなかつたのか。それを何もドイツまで行つて、わざ〳〵農家に泊つたりしなくてもと思へるのだが、それにはそれなりの理由がある。

石原はパリで、はじめて西欧文明を目のあたりにした。そこで石原が見たものは、頽廃した文明であつた。世界中どこの国でも、もと〳〵は、大抵、農業国である。フランスも、ドイツも、もとはと云へば、農業国であつた。それが産業革命を経て、工業国、商業国へと変つて行き、自ら生産しない層が増大し、文明は享楽的になつて行つた。このやうな文明を、石原は頽廃と見て、この文明は遠からず滅亡すると考へた。それと比べれば、農村の健全な子弟こそ、未来を担ひ得る

と判断したのである。

石原の農村重視は、単に自分が山形県庄内といふ農村の出身であったからだけでは、ない。石原は軍人として、常々、軍隊の兵のことが念頭から離れない。その頃の日本は農業国であり、人口の大多数は農民であったから、兵隊もほとんどは農村の子弟である。石原は殊の外、兵を可愛がり、「神の如き兵」とまで云ってゐるのは、この愚直な農村の青年たちこそ、大日本帝国の礎と考へてゐたからであらうと思はれる。

石原は日常生活においても都会をきらひ、日本では東京郊外、世田谷に居を構へ、ドイツでも、ベルリンを避けて、ポツダムとか、その周辺を好んでゐる。戦後は、都市解体、国民皆農を主張し(『新日本の建設』など)、自ら西山農場で、開墾生活を営んだ。石原は生涯を通して、農本主義者だったのである。

三　ポツダムからシュラハテンゼーへ

ハルツへの旅行より少し前の六月のはじめ、ドレスデンから友人が訪ねて来て、石原の所に泊った。今度、ポツダムに移転することになり、下宿探しに来たのである。石原はこの友人にポツダム見物の案内をし、友人はこの町が大いに気に入った。友人は町だけが気に入ったのではない。石原の下宿の婆さんの親切振りが、友人には一層好ましかった。婆さんにも、石原よりは愛想がよい、この友人の方がよりよいに決まってゐる。そこで、石原はこの下宿を、友人にゆづり、自分は別の家を探すことにした。

婆サン内心喜ビナガラ口先デハ、「信心深ク立派ナ大尉殿ガ出テ行カルルコトハ誠ニ名残リ惜シイ」等ト芝居ゲタ事ヲ申ス。（六月六日）

石原は、こゝポツダムの下宿では、出来るだけドイツ人の家庭に溶け込まうとしてゐたが、「新住居」では、「成ルベク家族トハナレテ生活シ得ル所ヲ撰ブ考ナリ」と云ってゐる。西洋式日常生活のＡＢＣは卒業、これからは戦史研究に集中しようとする意思の現れか。

下宿探しは、ベルリンとポツダムの新聞に、広告を出すことにした。希望地は、ポツダム、または、その少しベルリン寄りのニコラスゼー(Nikolassee)の付近とした。下宿を探すのに、新聞広告を使ふのは、ドイツでは極く普通に用ゐられる方法である。

ポツダムからは一名、ベルリンからは十名近くの応答が返って来た。住みたい所は、ベルリンではない。ポツダムか、ニコラスゼーであるのに、それを無視しての応募は、ベルリンでは、それだけ部屋があまってゐるからである。

麻ノ暴落ノ為、物騒ト考ヘ田舎ヘ田舎ヘト移リタガル傾向ガアルラシ。（六月十八日）

これは、インフレ時代のベルリン生活の一端を示す資料として役立つ。

この時のポツダムの候補下宿は、北向きの小さな部屋で不可、なか〳〵適当なものが見つからないので、いっそベルリンにしたらなどと進言する人もゐたが、石原はベルリンのやうな都会には住みたくないと、初心をまげない。

六月二十二日、漸く、下宿が決まった。場所は当初の予定より少し

ずれて、ニコラスゼーから電車の駅で一つベルリン寄りのシュラハテンゼー（Schlachtensee）である。位置の大要を説明すれば、ワンゼー（Wannsee）の東約四キロの所、シュラハテンゼーといふ名の「く」の字形の小さな湖のほとりにある駅から、真直ぐ東南にすゝんだ角の二階家である。「兎ニ角場所ハ頗ルヨキ所」と手紙には書いてある。

下宿の家族構成は、主婦（六十くらゐ）、娘、息子の三人に、女中である。主婦は二年前に未亡人となり、以来、健康がすぐれない。半病人だから、あまり喋らず、ポツダムの下宿の婆さんのやうに口先ばかりでないのがよいと、最初は思へたのだつたが、病気は、はじめ神経痛とか聞いてゐたのに、実は、「強度ノヒステリー」（六月三十日）で、普段はいゝのであるが、時に女中等を大へん困らせるといふことが分かつた。

娘は二十四五か、あるいは三十近いかもしれないと、石原には見えた。しかし、何と、十八歳であつた（七月二十一日の手紙）。豚のやうに肥つた女で、この娘がベルリンまで毎日働きに出て、一家を支へてゐる。許婚の男性はゐるが、まだ結婚はしてゐない。弟が学校を卒へて、職につくまでは頑張るつもりらしい。

男の子は、二十くらゐで、中学校上級生か、高校生である。大へん生真面目で、いつも姿勢を正して、「大尉殿！」と呼びかける。住所は、bei Frau Müller, Schlachtensee-Berlin Victoriastr. 12 である。

一室ナルモ隣ニアルサロンハ、自由ニ使用スル約束ナリ。室代一ケ月三十万麻（マルク）。戦前、我十五万円ニ当ル。如何ナル金持ニテモ日本ニテハ、一室ニ月十五万円ヲ出シ得ルモノナカラン、大シタモノ也。（六月二十二日）

「戦前」、つまり第一次世界大戦前といへば、大正二年あたりか。当時の価格、一円＝二マルクで計算すれば、三十万マルクは、十五万円に相当すると云ふのである。その頃の銀行員（大卒）の初任給が四十円、総理大臣の月給は千円だつたから、十五万円がどれほどの大金であつたかは、大よそ見当がつく。しかし、これは単なる無意味な数字の遊びに過ぎない。石原はこんなナンセンスも好きだつたやうである。

大正十二年六月末の三十万マルクを時価で算出すれば、公務員（高文合格者）の初任給七十円時代の十円程度であらうか。丁度、同時期にベルリンに留学してゐた小宮豊隆の日記によれば、十円足らずで、日本でなら百円もするやうな部屋が借りられたと云ふ。日本人のやうな外国人にとつては、マルク暴落による余慶である。

ポツダムハ細雨ヲ以テ送リ、シュラハテンゼーハ晴天ヲ以テ迎フ。（六月三十日）

例によつて、石原は文学的な手紙で引越を伝へてゐる。

四　統制主義

近ごろの、極く一般的な通念としては、先の戦争は一部の人々の帝国主義的な考へに引きずられて、国民はいや〳〵ながら戦争を行つたと云つても、大きく間違つてはゐないであらう。

しかし、これには二つの問題点がある。第一は、当時の新聞、その他の資料で見るかぎり、国民はいや〳〵ながら戦つてゐたとは、どう

しても思へない。いや、むしろわが国の海外進出に歓呼の声をあげてゐたのではなかつたか。これに対する反論は、容易に想像がつく。最近、流行の言葉を使へば、国民はマインド・コントロールされてゐたのだ、と。更にこれに応へることも、可能である。神なき時代、全てが相対化した現代において、あの頃は酔つてゐて、今は白面(しらふ)であると、いかなる根拠によつて判断するのか。あの頃が白面で、今が酔つてゐるのかもしれない。

第二に、日本の帝国主義の推進者は、誰だつたのか。この指摘はさう簡単ではない。その点に、この戦争の性格があると思ふが、強ひてあげれば、大企業・財閥であり、より具体的には、それと結託してゐた政界および軍部といふことにならうか。

ところが、歴代の内閣は、常に、戦線の不拡大を表明してゐたし、日米戦争の導火線となつたと云はれる満洲事変の首謀者・石原は、次のやうに云つてゐる。

新聞上ニ武藤山治氏ノ実業同志会ニ関スル檄文ヲ面白クヨム。……政策中ニモ資本家本位ノ、小生ニハ賛成出来ナイコトアルモ、兎ニ角他ノ政党等ニ比シ真面目ナ注目スベキモノト考フ。

（六月二十三日）

武藤山治（慶応三年―昭和九年）は、鐘ケ淵紡績会社々長、大正十二年、政界刷新や減税を旗印に、実業同志会を率ゐて政界に乗り出した。

石原はこゝだけでなく、いろ〳〵の所で、資本家の横暴に対して不快感を示してゐる。例へば、一週間後の手紙には、

独乙ノ革命ハ百年前ノ仏国革命ノ如ク、一ノ権力階級ヲ排斥シタルノミニテ、依然、資本家全盛ノ時代。資本家ノ横暴ハ、到底、日本等ニテ見ラルル図ニアラズ。而モ精神労働者ト肉体労働者ノ争ヒ、盛ニシテ中々一致シテ資本家ニ当ルベクモアラズ。此処ガ資本家ノ狙ヒ場所也ト見ユ。（七月一日）

と、ある。こゝで「独乙ノ革命」と云つてゐるのは、いはゆる十一月革命で、第一次世界大戦の最末期、一時、ベルリンは赤旗にうまり、皇帝ヴィルヘル二世はオランダへ亡命し、ドイツは共和制へと移行した政変を指してゐる。この時、社会主義体制を目指す第二革命の可能性もないではなかつたが、それは実現せず、「依然、資本家全盛の時代」なのである。

石原は大企業や財閥の手先となつて、満洲事変を起したのであれば、論理は首尾一貫して、うまくつながつて行く。しかし、手紙からもうかゞへるやうに、石原は資本家階級をひどく嫌つてゐた。それが、後年には、資本家の犬となつて、満洲事変を引き起したのであらうか。

七月一日の手紙には、更に次のやうにつゞけてゐる。

然モ此ノ如ク物価騰貴モ来リテハ、遂ニ労働者（二様ノ）ノ一致ヲ来スニ至ルヤモ計リ難ク、カクシテ真ニ社会主義ノ実行ヲ見、露国ノ経験ヲ利用シ独乙人独特ノ組織力ニヨリ、真ニ新シキ社会ヲ成形シ得ザルニアラザルベシ。カクシテ世界ハ真ノ新時代ニ入リ日蓮主義ガ最後ノ解決ヲ与フル時ニナルベキカ。（七月一日）

既に何度も触れたが、石原は共産主義に強い関心を示してゐた。マ

ルクスやエンゲルス、そしてレーニンの著作にも多く目を通してゐる。例へば、マルクスの『ブリュメール十八日』や『経済学批判』、エンゲルス『空想より科学へ』、そしてレーニン『国家と革命』などからの引用(『われらの世界観』、選集7―二七四、二九二、二九三頁)があるのでも、それが分かる。

しかし、反面、石原は共産主義を徹底的に嫌った。戦後、マッカーサーへの書簡の中では、「我国の現状を見るに、共産主義の攻勢は、頗る活発にして、今や根本的対策樹立の要緊切なりと愚考仕り候」と云ひ、「共産党を断然圧倒し得る如きイデオロギー中心の新政党」の結成が必要であると説いてゐる(選集9―九七頁)。遡つて、漢口駐留中の手紙には、

私有財産ヲ全然否定スル共産主義ナドハ到底行ルベキモノデハアリマスマイガ、社会　政策ノ徹底セル施設ニヨッテ前ニ述ベマシタ整理ヲ断行スルコトガ極メテ必要デス。(大正九年六月二十日)

と書いてゐる。

結局、石原が最終的に目指したものは、一言でいへば、統制主義といふことになるであらう。石原はニューディールやマアーシャル・プランをも例に引きながら、次のやうに結論してゐる。

専制から自由へ、自由から統制への歩みこそ、近代社会の発展において否定すべからざる世界共通の傾向ということができる。

(『新日本の進路』、選集7―三〇八頁)

この点に関して、ピーティは、「石原はおそらく、経済的な統制主義体制と、政治的なそれとを本質的に混同していたのであろう。そのために、彼は統制主義国家の中核思想である計画が、現在理解されているような全体主義ではないと、長々と説明しなければならなくなった」(『「日米対決」と石原莞爾』、二七三頁)と批判してゐるが、この指摘は、的を射てゐない。歴史を動かすのは政治よりは、むしろ経済であり、政治も経済によって左右されるといふ認識が、石原にはあったやうに思はれる。それだからこそ、満洲では、経済問題を重視し、宮崎のやうなブレインを使ったのである。おそらく、石原はこのやうな歴史認識をマルクスの著作から学んだであらう。

五　閣下

このあたりで、いかにも石原らしい面目躍如とした場面を幾つか披露しておく。

ドイツ人一行に加はって、ハルツ地方へのワンゲルについては、前に書いたが、その際、ドイツ人たちに石原は、「未来の陸軍大臣」で通ってしまひ、皆から「閣下!」と呼ばれた。また、ちん君の妹などは、樅の木の苗を持ち帰り、それを庭に植ゑて、石原の記念とし、この木を「閣下」と名づけた。

もう一つの話柄。シュラハテンゼーの下宿の男の子は、十七歳。石原よりよほど大きい。この息子が、時々、「大尉殿!　御暇ですか」と部屋に顔を出す。熱心なクリスチャンで、こゝらが石原と気が合ふ所である。ある時、石原がキリスト教の神を少々攻撃したのに対し、相手はムキになって反論して来た。

低脳(ママ)ノ小僧、到底未来ノ陸軍大臣ニ抵抗シ得ベクモアラズ、降参ノ止ムナキニ至リ……

までは、よかつたのであるが、思ひがけぬ逆襲を食らふ。

……反問シテ曰ク、「貴君方ノ神様ハ如何」ト、中々容易ノ問題ニアラズ。何分語学出来ザル為閉口、三十分許リシャベリ立テタルモ遂ニ了解セシメ難カリキ。（七月三日）

ドイツ語がうまく話せない所為にしてゐるが、本当は、さうではなかつたであらう。宗教の核心――特に、日蓮主義の神髄を説いて、相手を納得させるのは、至難の業である。日本人に日本語で説明してさへ、むづかしい。論理を越えた部分を含む信仰を、論理的に組み立てゝ行かねばならぬヂレンマがある。

ドイツの青年を何とか説得しようと、いろ〳〵試みたが、うまく行かず、困りはてた末に、石原はどう云つたか。もつと研究して、今度は分かるやうに説明してやらう、などとは、云はない。

「君ノ学問ガ未ダ足ラナイカラ熱心ニ勉強シタマヘ。将来少シハ判ル様ニナルベシ」トノ訓戒ヲ与フ。

答へに窮した者が、逆に相手に「訓戒」を与へるとは、大へん石原らしい態度として、読んでゐて、微笑を禁じ得ない。

話柄その三。

近来ノ手紙ニハ直チニ K. Ishiwara ニテ敬称ナシ。世間ノ体裁悪キヲ以テ、必ズ Herrn（様）ヲ用ヒラルベシ。自分ノ御亭主ニ「石原莞爾」ト呼ビ捨テハ少シヒドイデハアリマセヌカ。（七月三日）

弟の石原六郎は、兄が東京弁か、大阪弁が話せたら、漫才をやつても、うまく行つたらう、と書いてゐるが（選集9―二七八頁）、確かに、さういふ面はあつたのであり、そこを見落としてはならない。

六　死生観

この頃、知人の妻が、二人も自殺した。その一人は、五月十八日のちん君の誕生祝の日に知らせがあつたし、そして、七月にも、もう一人である。「自殺」について、石原は、次のやうにコメントしてゐる。

少シ真面目ニ人生ヲ考ヘルモノハ世ノ中ニ愛想ヲツカシ人間廃業ヲ思ヒ立ツノハ、余リニ自然的ノコトデハアリマセヌカ。……考ヘレバ考ヘル程ツマラヌ浮世也。小生ハ事情ノ如何ヲ問ハズ自殺スルモノニハ常ニ、満腔ノ同情ヲ覚エマス。彼等ハ確カニ人生問題解決ノ第一歩迄ハ進ンデ来タノデスカラ。（七月十四日）

幼年学校、士官学校、陸大とエリート・コースを進み、遠くヨーロッパにまで留学して、三十二歳の石原の前途は洋々としてゐたやうに見えるのだが、意外にも、「人間廃業ヲ思ヒ立ツノハ……自然的ノコト」であり、「ツマラヌ浮世也」と感じてゐた。いつも狂人のまねをしてゐる者は、半ば狂人であるとされるが、「自殺スルモノニハ常ニ、満

腔ノ同情」を覚える石原は、自殺へ半歩ふみ出してゐたと云へるが、決行にまでは至らない。

此ノツマラヌ末法ノ浮世ニ、営々ノ生活ヲナス我等ノ信念ハ本仏ノ大生命ヲ信ジ、此大生命ノ一分子トシテ本化ノ号令ニヨリ、我等ノ天職ヲ完フスルニアル。……「南無妙法蓮華経ト唱ヘテ唱ヘテ死ニ死スル」コトニヨツテ、初メテ寂光ノ本土ニ帰リ得ルノデスカラ、人間ノ了見ニヨル人間ノ廃業デハ結局地獄ヲマヌカレマセヌ。（七月十四日）

敗戦となつて、幾人かの軍人が自決した。元関東軍司令官・本庄繁、元参謀総長・杉山元、陸軍大臣・阿南惟幾など。しかし、一時は、帝国陸軍の「顔」の感さへあつたのに、石原はしなかつた。東京裁判の証人として呼ばれ、「おれこそ戦犯ぢゃないか。なぜ、引張らぬ？」と迫つたと云ふから、命が惜しかつたゝめとは思へないが、また別の見方があり、石原にはそんな毅然とした姿はなく、「むろん、被告となることは、望むところではなかった」（粟屋憲太郎「東京裁判　極限の人間ドラマ」、雑誌「THIS IS 読売」八月号、平成五年）となれば、膀胱癌で重体だつたにもかゝはらず、石原は恋々と生にしがみついてゐたことになる。一体、どう考へればいゝのか。

石原にとつて、宗教は中途半端なものでなく、全人格に関つてゐる。それならば、「本化ノ号令ニヨリ、我等ノ天職ヲ完フスル」ことこそ大事であり、「人間ノ了見ニヨル人間ノ廃業デハ結局地獄ヲマヌカレヌ」結果となる。終戦直後、石原は病軀をおして、各地で講演し、新日本の建設について提言して廻つた。現状において、これが自分の責務との思ひがあつたのではなかつたか。死は暗く、生もまた暗かつたのである。

石原は、かうも書いてゐる。

有島武郎氏ノ自殺、大ナル興味ヲ以テ見ル。凡テハ時代相ノ尊キ犠牲也。本化ノ救ヲ要スルコト益々切。（八月十六日）

石原には、本化の救ひこそが真実であつた。

七　インフレ

ある日（七月二十一日）、下宿の娘――石原がつけたあだ名によれば「豚姫」が、おそる〳〵部屋に入つて来て、

「誠に申上げ兼ねますが、お金を少々拝借できませんか」

「いかほど」

「百万マルク計り」

百万マルクは、この時の計算で、約十円である。それ程の大金ではない。早速、石原は貸してやつた。下宿してゐる外国人に借金を申込むとは、よく〳〵困り果てた結果であらう。これを機会に、娘といろ〳〵話して見れば、年はまだ十八で、父親が、生前、経営してゐた町工場を一人で切り盛りして、一家を支へてゐるのである。この頃は、すでにインフレに入つてゐたから、町工場のやり繰りは一層大へんだつたであらう。石原はその健気さに感心するが、「荒クレ男」の職工と交渉するのには、かうした「不細工」な女の方が、なまじ美人よりは、好都合であらうなどと、いつものやうに、からかひの一言も忘れない。

石原がベルリンに着いたのが三月下旬、それから四ケ月がたつ。マルクの下落は、到着時から、そろ〳〵兆しが見えはじめてゐたが、七月に入り、益々加速して行つた。ハイデルベルクに留学してゐた天野貞祐によれば、その暴落ぶりは、日々進行どころではなく、一日のうちの数時間で何分の一かに価値が下落するのも稀ではなかつた（「ハイデルベルクの思い出」）。

麻ノ下落甚シク、殊ニ物価ノ騰貴驚ク外ナシ。此処ニ週間の間ニ食物等ハ三倍位トナレリ。（七月二十一日）

約一週間不在ノ間、又モヤ馬克大暴落。一円ガ百数十万馬克トナル（独乙到着当時ハ一円約一万馬克ナリキ）。物価モ□シテ之ニ並行シテ上ル為、独乙人ノ困難目モ当テラレズ。殊ニ最近ハ此大暴落ノ為、紙幣払底、今日ノ如キモ殆ド両替出来ズ。金ヲ持チナガラ（英貨）飯ヲ食フニモ困ル有様也。（八月十一日）

物価騰貴のため、人々の不満はたかまり、各地でストライキへの動きが盛んである。このやうな状況を、石原は、

伯林市内ハ已ニ電車ノ運行ヲ見ズ。人心動揺ノ風アリ。（八月十二日）

今朝来、市内ノ電車ノミナラズ、乗合自動車ハ全ク動カザリシガ、午後一時頃更ニ地下鉄道ノ罷業起リ、交通ハ高価ナル自動車ニヨル外ナク、人々悉ク徒歩スル為、市内ノ雑タフ（踏）甚シ。（八月十三日）

と伝へてゐる。小宮豊隆も、「内では王党が隙をねらっている。社会主義・共産主義の連中が赤旗をふりまわしている。職工はとかくにストライキをする」（「伯林日記」七月三日、雑誌「心」昭和三八年七月号）と、当時の世相を写してゐる。食品の不足もまた限界に近い。

食料品ノ欠乏甚シク、食料品店ノ前ニハ数百人ノ婦人行列ヲナシテ、数時間ヲ待チ、辛ジテパンノ一片ヲ求メ居ル有様也。「バタ一斤百五十万馬克也」トテ家ノ女中胆ヲツブス。（八月十三日）

その割には、ドイツ人は平静である。決してパニックに陥ってゐない。

大戦以来殆ド「マヒ」セル独乙人ハ案外呑気ナ顔ヲシテ居ルニハ驚ク外ナシ。（八月十二日）

然シ外見極メテ呑気サウ也。（八月十三日）

こゝで、石原はドイツ人の平静さに感心してゐるのではない。この無表情は、「戦争ノ惨害」であるとしてゐる。

このマルクの暴落とそれに伴ふインフレを、ドイツの人々はどう見てゐたか。それについて、天野（貞祐）は一つの資料を提供してゐる（「ハイデルベルクの思い出」）。ドイツ人は、この時、「シーバー」といふ言葉を使つた。シーバー（Schieber）――つまり、「押し出す人」は、マルクを外国に押し出して、外貨に替へた後、マルクの下

落に加担した。マルクの価値が下がれば下がるほど、この人たちは巨万の富を手に入れたからである。「かれ等の眼中国家も無く同胞も無く、有るものは私利私欲のみ」であり、そして、「シーバーはユデア商人に限るもので純正ドイツ人のうちにはさる賤奴」はゐないと、人々は噂した。ナチスの登場は近い。

八月、「消極的抵抗」を呼びかけてゐたクーノ（Wilhelm Cuno, 1876–1933）内閣に替り、シュトレーゼマン（Gustav Stresemann, 1878–1929）が首相に就任。シュトレーゼマンは、「履行政策」を取つて、この難局を乗り切らうとした。しかし、一旦、傾斜がついて、すべりだしたものを、食ひとめるのは至難である。内閣が交替しても、インフレはどん〳〵進み、十一月には、その極に達した。前年一九二二年（大正十一年）の七月時点で、一ドル＝四九三マルクだつたが、二三年一月にはルール占拠があり、一万七九〇〇マルク、十月には、三億四五〇〇万マルクとなり、十一月には何と一ドル＝四兆二〇〇〇億マルクにまでなつた。文字通り、天文学的数字であるが、このインフレも、国立銀行総裁シャハト（Hjalmar Schacht, 1877–1970）の努力により、土地、山林などの不動産と企業を担保としたレンテンマルク（Rentenmark）を発行、一兆マルク＝一レンテンマルクの比率で交換してからは、急速に終息に向かつた。

八　反米

八月は、外には、インフレの進行と物資の不足のために、不安定な日がつゞいたが、石原個人について云へば、友人と再び、エルベ河・ドレスデンに遊びに行き、また別の友人にポツダムを観光案内してゐる。それから、田中智学の息子である里見岸雄がやつて来た。しばらく、ベルリンに滞在して、自分の著書をドイツ語に翻訳しようといふのである。フリードリヒシュトラーセ駅に出迎へた石原は、開口一番、

> 先生、若し女が御必要でしたら、唯今の独乙は非常に危険でございますから、私が護衛として、お供致します。

と、真顔で云つた。里見は、「意表的な言葉だと思つた」と、その時の印象を述べてゐる（「伯林時代の石原莞爾」―『石原莞爾研究』第一集、九頁）。

石原は里見の著書の翻訳に大へん力を注いだ。これで、自分の信ずる日蓮主義をヨーロッパに広めようと意図してゐるからである。尤も、著書といつても（『日本国体研究宣言』）、タイプライターで打つて五十枚ほどの小冊子に過ぎない。里見はドイツ語が出来ないから、何から何まで石原がしなくてはならない。まづ、翻訳者の選定から始まつた。幸ひ、日本に五年も滞在したドイツ人が見つかつた。「日本語ニ頗ル巧」であるが、たゞ、このドイツ人、「ズベラサウナ人間」であり、時々、酒気を帯びてやつて来るのには、どうも感心出来ない。翻訳料は、一時間百万マルク、その二、三日後には、二百万マルクの請求があつた。翻訳の場所は、里見がベルリンに借りた下宿の部屋、石原は毎日そこに出掛けて行つて、翻訳の仕事を監督することにした。石原は、一つには、ベルリンまで毎日通はねばならず、またシュラハテンゼーの下宿の女主人の病気のこともあり、ベルリンへ引越す決心をした。

翻訳の作業中は、頻繁に里見と会ひ、食事もよく一緒にしてゐる。里見はアルコールが好きで、特にビールは大好物だつたが、石原は酒

を飲まない。里見から、「石原サンハ飲マナイノガ、何ヨリノ欠点」（八月二十二日）と云はれてゐる。後年も、石原は酒も煙草ものまなかつたが、宴会にはどこまでも付き合つた。石原はアルコールなしに酔へる人物だつたのである。

石原は翻訳にはなか〳〵力を入れてゐたから、妻にも進捗状況を一々書いてをり、しばらく、さうした報告がつゞくが、それとは別に、何げなく手紙の中に挿入された次のエピソードは、書き手の予想を越えて、私たち読む者の興味を大いに引く。これは、石原といふ人物を考へる場合の重要なポイントとなるであらう。

八月二十八日、石原は友人と連れ立つて、活動写真を見に行つた。一体、石原は活動写真を、あまり好まない。しかし、外国語の勉強には、活動が一番だと云はれて、ドイツに来て、既に一度見に行つてゐる（七月二十九日）。これはフリードリヒ大王の功績を映したものであつたから、戦場における大王の行動がよくあらはれてゐて、「真ニ面白ク且有益」であつた。ところが、今度のは、違つてゐた。

亜米利加物ニテ、排日宣伝ノフィルム大ニ癪ニサハリ大声ニテ亜米利加ノ悪口ヲ話セバ、近所ニ居リシ若干ノ独乙人ハ大ニ同意ヲ表ス。少々腹ヲイヤシテ出ル。考ヘテ見レバ少々大人気ナカリシ。然シ亜米利加ハ気ノ毒ナガラ何時カハ一度タタイテヤラザレバ彼ヲ救フ能ハザルナリ。（八月二十八日）

こゝでこの手紙が書かれた大正十二年頃の日本における反米意識を見ておかねばならないが、日本の反米は、アメリカの排日への反発であるから、はじめに、排日の歴史を概観しておく（若槻泰雄『排日の歴史』〈中央公論社〉による）。

日本からアメリカへの移民は明治になつて間もなくからはじまつたが、排日運動が組織的になつたのは、明治三十年代からで、その中心地はいつもカリフォルニア州のサンフランシスコであつた。以来、排日の気運はます〳〵激しくなつて行くが、さうした中で特筆すべき第一は、一九〇六年（明治三十九年）、サンフランシスコ大地震の後、日本は多額の援助金を送つたにもかゝはらず、日本人児童は公立の小学校からしめだされてしまつた。丁度、この時、アメリカにゐた永井荷風は、短編『悪友』（『あめりか物語』所収）で、この事件にふれてゐる。

一時、加州で日本の学童排斥問題が喧しくなつて来た時分、日米間には戦争が起るだらうと、紐育を初めとして、国内の新聞は種々な臆説を書立てた。

日米戦争が話題となつた第一弾である。しかし、日本国内での反応はにぶく、反米の声もあまり上がらなかつた。

次は、一九一三年（大正二年）、日本人の土地所有を禁止する「排日土地法」が、カリフォルニア州の州議会で可決された。この時は、前回とは異なり、日本国内に、反米の輿論が大いに高まり、この法案粉砕の集会が開かれ、日米開戦を想定した本まで出版された。日本における反米思想の最初の現れである。

第三には、それから七年後の一九二〇年（大正九年）、またもカリフォルニアで、一そう厳重に日本人の土地所有を禁止する、より苛酷な第二次排日土地法が成立した。前回のでは、日系一世は土地が持て

ないが、アメリカ国籍を有する日系二世には、土地所有が認められたが、第二次においては、それさへも禁止された。そればかりではない。この法案がカリフォルニアで可決されると、同様のものが、他の多くの州にも広がつて行つたのである。石原が見た「排日宣伝ノフィルム」とは、おそらく、このカリフォルニアでの法案の成立と他州への伝播あたりを映したものであつたであらう。

もと〳〵石原は、単にアメリカに対してだけでなく、より広く欧米に――つまり、白色人種に対して反発を示してゐる。それは、航西中の船上での西洋人への非難、そして、パリでも、ベルリンでも、「毛唐」といふ言葉を連発しながら、西洋文明および西洋人への批判を繰返し述べてゐるのは、これまでこの稿においても、詳しく見て来たとほりである。なかでも、人種問題には、特に強く反応してゐる。ドイツの賠償金不払ひを理由に、フランスがルール地方に侵入して来た時、ドイツ人は、「黒人ヲ以テ白人ヲ攻ムルコトヲ甚シク非人道ナリ」と憤慨したが、石原は、「小生有色人種トシテ内心大ニ平ナラズ」であつたことは、既に引用した。

しかし、石原のアメリカに対する感情は、これら一般に西洋への反発をはるかに越えてゐるやうに思はれる。ベルリン滞在中、あるアメリカの大尉が、石原にたづねた。

「石原大尉は帰途アメリカに立寄るか」

「ナイン（否）、自分がアメリカへ行くのは、占領軍司令官としてだけだ」

この話は、里見岸雄が回想記（『石原莞爾研究』第一集）に書いてから、諸書に引用されてゐる。

日本は明治の開国以来、基本的には対米協調を堅持して来た。例へば、時代はやゝ溯るが、明治三十六年、森鷗外は、「我邦に対して昔から多くの同情を持つて居る米国」（「黄禍論梗概」）と云つてゐるし、明治、大正時代の言はゞ日本の国論の代表ともいふべき山県有朋にしても、「わが国の外交の基礎を英米との協調に置くことを年来の持論としていた」（岡義武『山県有朋』、岩波書店、一七二頁）のであつた。

日米関係は、学童排斥問題や排日土地法、第二次排日土地法などのために、ある程度の軋轢はあつたものゝ、大体から見れば、対米協調が主流であつた。そのやうな輿論の中にあつて、石原の「反米」感情の強さが目立つ。この手紙から読みとれる重要な点の一つである。

それでは、何故、石原はかくも反米だつたのか。これらは全て、将来の日米開戦への予感に基づいてゐる。有名な最終戦争論の構図は、ドイツ滞在中に出来上がつた（「戦争史大観の序説」、選集3―一一六頁）。少し後になるが、満蒙領有計画にしても、石原のそれは、他の人々のとは異なり、来たるべき日米決戦に備へての満蒙である。こゝに石原独自の見解がある。

第二に、この手紙から読みとれる注目すべき所は、排日の映画を見て、いかに腹が立つても、大抵は、むッとしたまゝそこを立ち去るであらう。石原はどうしたか。映画館の満座の中で、大声でアメリカを罵つた。日本でなら、まだしも、それを外国・ドイツの映画館でやらかした。これは、石原の性格の現れとして、大へん印象的である。尤も、石原自身、「少々大人気ナカリシ」と書いてゐる所を見ると、後年、上司の東条英機（当時、中将）を、「東条上等兵！」などと云つたあとも、大人気ないと感じてゐたかもしれない。

八月三十一日、石原はシュラハテンゼーの下宿を引払つて、ベルリン・ヴィルマースドルフに引越した。